

歌合せ

誰が置いていったものか、新薬のマスコットをかたどったキーホルダーがステンレスのラック棚においてある。その横にはカバーの焼けた『金属物理学の基礎』が上下巻、今また夏の日差しを浴びている。カーテンのぞんざいに開けられた窓からは、狭い運動場が見えている。

室内は、数人の研究者が利用しているにふさわしい乱雑ぶりで、参考書の山はもちろんのこと、徹夜で実験を重ねるための食べ物や、汚れた白衣までもが、あらゆるスペースに押し込まれている。本棚に仕切られた指導教官の机の上には、『出張中』と書かれたメモが貼り付けてあり、そこだけ祀られているかのようにモノの氾濫を免れている。部屋の隅で酷使された冷蔵庫が、熱交換器の不具合の音を響かせながら働いている。その音を覆うようにして数人の足音が近づき、すぐに騒々しく話す声が満ちてきた。

「……それで気化した不純物がさ、負圧に吸い出されて、濃度が落ちたんじゃないか」

と、ドアを開けて入ってきたのは修士の高坂だった。おなじく修士の林が、間をおかずに続く。遅れて三人目に学部生の三津橋麻奈が、手に持ったノートをめくりつつ入ってきた。

「でもあの配管は溶接付けだろう？ 見た感じ穴なんか空いてないし、放出ガスが出てるってこと？ どうか、それは」

林は高坂の言うことを吟味しながら、自分の席に腰を落ち着ける。高坂は腹がへっているのか、荷物を机の上に放り出すと、そのまま冷蔵庫のドアを空け、一瞬眉をしかめてから、そのなかに手を伸ばす。三津橋は高坂の肩越しに視線を投げて、彼が自分の食料を盗らないかと監視する。目当てはこれだよ、というように高坂は菓子パンを出して、三津橋の目の前で振って見せた。

「前もそういうことがあっただろう。名国理化だったっけ？ あの

容器を造ったのは。溶接材料に機械油が染みていたとかで、それが真空状態で気化して、イオンクロマトで検知されて……。あれ、どうしたかな？」

「和泉くんが名国理化に苦情を言って、作り直しました」

三津橋は高坂を睨みつけながら答える。

「ああ、そうだった。彼はそういう調整、得意だよな。つい任せてしまう」

「本当は誰の担当だったんですか？ 和泉くんが手配したんじゃないんでしょう？」

「助手だよ、なんもしない」

「うへえ、またか」

「溶接不良って、今回もそうじゃないかって、和泉が言っていたの？」

「昨日の朝にそういう可能性があるって」

「ふうん……」

高坂が考え込むと研究室内は会話がいったん途絶えた。林は研究室のノートに実験設備の不具合の可能性について記録を始め、三津橋は高坂に続いて冷蔵庫をあさり始める。

しばらくして廊下から靴音が近づき、開いたままの入り口に学部生の和泉が現れた。「おう」と、高坂が顔をあげて迎え入れる。和泉は先に来ていた三人に挨拶をして、それから通学に使っている靴を自分の机の上に置いた。

三津橋がさっそく近づいて、容器の不具合について話した。

「ああ、あれ、チャンバーのパワー不足ですよ。なんか詰まってるんじゃないですかね」

「チャンバー？」

林は記録するのを止めて、訊きかえした。

「真空容器のまえでいったん閉止して、差圧計で排気圧を調べたので間違いないと思います。チャンバーの真空ポンプが壊れているのか、何か詰まっているのか、その場ではどっちかわかりませんでし

たが、あとで裏に回って見たら、フィルターが真っ黒でした」

「チャンバー。それだけのこと。高坂先生と林先生は午前中ずっとそれにかかりつきりで、たったいま名国理化さんの責任に落ち着いたんでしたよね？」

「まあ、そういうなよ」

高坂は苦笑した。

「いや、可能性です。確証があるわけじゃない」

「でも、チャンバーの排気口が詰まっているのは間違いないんでしよう？」

「ええ、まあ。供給口とチャンバーの圧力差があまりなかったの
で、可能性は高い」

「ほらね」

三津橋は和泉の検査を自分のことのように誇ってみせる。二人の先輩の不甲斐なさをからかっているのだった。不具合の原因について情報が得られると、林は記録をいったん止めて、再び実験室へ向かおうと立ち上がった。せっかく午前中から大学へ来たのだし、あまり時間を無駄にしたくないらしかった。

「見てくるんですか？」

と、三津橋が訊いた。

「うん。午前中、何もできなかったし、ちよつとでも早く始めないと、俺の使用時間が終わってしまう。実験室を次に使えるのは、ええつと、六日後。だから、是が非でももう少し進めておかないと」

「手伝いますよ」

と、和泉も立ち上がった。

林は頷いてから、先に行ってる、というように指で示して研究室から外へでた。和泉は鞆から洗濯してきた白衣を出して、すぐに後に続いた。

「和泉君が午前中からいたらよかったのにねえ」

二人を見送って三津橋がつぶやいた。高坂は女の姿勢がへんに硬直しているのを見て、そのセリフがいくらか意識されたものである

と感じる。「茶でも飲むか」と、引き出しの中をあさり始め、奥のほうからラップに包んだ玄米茶を発掘した。三津橋にも勧めようとして振り向いたが、首を振り手で遮って断られたので、あきらめる。電気ケトルに水道水を注ぎ、スイッチを入れる。

「このあいだ学食で、和泉が川端康成の本を読んだぞ」

と、何気なく話を振った。

「川端康成？ 好きなのかしら。なにか訊いたんですか？」

「いや、なんだか近寄りがたい雰囲気だった」

「まあ、和泉君はちよつと没頭してしまうときがありますよね。実験中なんかも、あんまり黙々と作業をするから、声をかけにくいときがある」

「前途多難か」

「は？」

三津橋は目を見開いて、高坂のからかいをたしなめる。

「敬意ですよ。研究者としての。そりゃあなんぼかかっこいいですけど。でも、たしかに、近寄りがたいところがありますね。悲しいくらい」

「そりゃ、深刻だな」

今度は、三津橋は手元にあつたメモを丸めて投げつけた。それを巧みに避けながら高坂は湯飲みを探す。シンクだけは女性の研究員からの要望で片付けられていて、食器は棚に仕舞われている。ただし、頻繁に使う食器は乾燥棚に重ねられているので、そこから見つけなければならぬ。

「和泉のほうはどうなんだ？」

「さあ、どうでしょうね」

三津橋は和泉の出て行った廊下のほうを見る。

「スーツ姿の女性と歩いているのを見たことがあるっていう子がいるんですよ」

「へえ、社会人か。しかし、それはまあお気の毒様だ」

「しかしですよ、高坂さんはどう思いますか？」

「うん？」

「あの和泉君に、いい人がいるように見えますかね？」

高坂は本気のような冗談のような三津橋の表情を眺めた。彼の好みではなかったが、顎のとがったするとい顔つきは子供のように見えなかった。まつげの長い女だった。和泉の態度が解せないのか、体から気だるさが滲んでいた。

「俺の経験から言えば、和泉はフリーだな。付き合ったことがあるかどうかさえ怪しい。いまのあいっぴに恋人がいるって言うなら、おれは出家してもいい」

「それは、それは」

「ほんとうだ。付き合っている相手がいたら、年中研究室に通っていたりしない」

「そうだといいんですけど」

再び高坂が笑うと、三津橋は愛想をつかしたのか、ひっぱたくまねをしてから研究室を出た。

高坂は一人残されて、煮出した玄米茶をしばらくすすった。渦中の人である和泉の机を何気なく見る。開いた鞆の中身がすこしだけのぞいていた。このあいだは川端康成の本であったが、こんどは北条民雄のものだった。

その小説はありきたりだった。会話は荒唐無稽で、地の文は死んでいた。和泉はカーソルを移動させ、次の投稿作品を展開させる。次に現れたのは歴史小説。作者の勉強の成果が、端々に浮かんでいる。奥州に落ち延びた義経が平泉で何日かを過ごし、ある日、義兄弟である藤原泰衡の視線に、おびえが浮かぶのを見つける話だった。

その話は和泉のどこかを刺激して、記憶の中をはしりこみ、あてもなくさまよった。自分にかかわる何ものが潜んでいる気がして、和泉は泰衡の裏切りをとくと味わうように吟味した。それはいかなる苦しさか、寂しさか、想像をめぐらせた。しかし、結局、ど

こか書ききれしていない、落ち着きのなさしか残らない。

何にもぶつからないいくつかの作品を読んでから、和泉はブラウザを閉じる。パソコンの画面には、バックグラウンドで起動していたエディターが展開している。キーを打ち文章を書き込み、たちまちそれを消去する。机の端のカップをとり、コーヒーを飲む。写真立てにはめられた一枚の写真が目に入り、和泉は体を起こす。イスの背もたれに体を預け、毛伸びをする。にごった呼気が肺の奥から漏れてくるようだった。

江実の帰宅までまだ三十分ほどあるが、その日の執筆はそれまでだった。和泉はデスクを離れ、同じ自室内にある本棚の前に立つ。アルバイトで稼いだ金で買った古書が十冊ほど並んでいる。どれも日本の古代のものだ。そのなかの一冊を手にとって、ベッドの上に座る。

下着にしみた汗が肌にまとわりついて、大腿が不快だった。エアコンの風にも扇風機の風にも体調を崩してしまうのだが、そうかといつて暑さは集中力をそぐ。幸い、家の近くに川幅の広い川が流れていて、その流れに沿って吹く風が和泉の部屋にもわずかに届く。次第に体の熱気が冷めていき、古代人の生活が書かれた論文に、引き込まれていく。厚い本の重みに腕がしびれ、ベッドに身を投げ出す。紙面に光を落としているのは、点けっぱなしになったモニターである。

階下から開錠する音が響き、和泉の集中が途切れる。江実がいつもの時間に帰宅したのだ。姉との二人暮らしは三年目になっている。仕事の帰りが遅く、普段からこの時間までは和泉一人である。家事を分担するぐらいの約束はあるのだが、料理だけは、帰宅時間が遅れようと江実の担当だ。昼食を大学の学食でとり、それから九時間が過ぎていても、和泉は律儀に間食をとらない。「自分で料理するのが嫌なんでしょう。どんなに飢えても、待ってるんでしょ？」と、責められても、曖昧に笑うのだった。

階下に下りると、江実は洗面でストッキングを脱いでいた。

「今日は？」

「コロッケ」

アイラインのとがった顔が答える。早くも室内に女の匂いがこもっている、和泉は一步退却する。

「新聞代、払った」

「そう、二千円ね。あとで渡す……、ねえ、このあいだ話したバイトの子、餓首よ。きょうの仕事あがり、課長に連れて行かれたわ」

「それは気の毒に」

「怒られて泣き出す子なんて、いままでいなかったんだもの。新鮮だけど、やっぱり迷惑ね。ねえ、あんたも、バイトで失敗したときに、泣いたりしたらそう思われるわよ。気をつけなさい」

「男は泣かない」

江実はにやりと笑い、手を伸ばす。指先がさつと振られ、和泉はそれが着替えのサインだと了解しリビングに戻る。背後からカーテンの引かれる音がする。姉の体がどしどしと洗面所の床を片足で跳ね、止んだ。

食事の後に姉弟で会話を持つ時期は終わっていた。くだけた格好でソファーに座りDVDプレーヤーを操作する江実を置いて、和泉は自室に退散する。自分がリビングを去ると、携帯電話で、付き合いのある男と話すのを知っていた。芝田という相手と、あいさつも交わしたことがある。好きになれない相手だが、姉に疎まれるのはさらに耐え難い。

節電と称して電球の切れたままの暗い階段を上り、和泉は自室に戻った。スクリーンセーバーを切ったパソコンのモニターが、暗い室内で待っていた。再びイスに座り、この数日格闘している原稿に向かい合うことにする。字面を追っていくと、たちまちまずいところが見えてくる。表現のいくつかを調整し、余計な文章を削る。許せる内容になったのをスクロールし、書きかけの文末に飛ぶ。

インターネットの創作サイトに投稿する予定であるその小説は、

書き始めてから二週間、枚数にして三十枚になっている。しかしこの数日は、自分の書いたものがまるで意味のないものに思えて、書いては消しを繰り返していた。

小説を書くことには何の縁もないはずだった。大学は工学部に所属し、三年目である。退官の時が見えてきた仏のような教授についていて、卒論のテーマはすでに決めている。単位も十分に取れていた。大学院に進学するかどうか迷っているものの、就職に問題があるとも思えない。大学で身を投じた分野は、性に合っていた。そのまま経験を積んだなら、江実も弟の業績に胸を張れる日が来るだろう。和泉自身も負い目に対して、戦ったといえるはずだ。それを、創作への執着が、どうなるかわからないものになっているのではないか。

それまで小説を書くころなどとは思いつかなかった和泉にとって、それは出会いだった。レポートの論文に使う語句の検索をしているときに、偶然、小説のなかに埋め込まれたその単語をヒットさせたのだ。その小説は、いま和泉が利用している投稿サイトに載せられたものだった。なんとなく目を走らせたその話は、まったく素人のもので、読者の興味を引くものではなかった。それが、かえっていけなかったのかもしれない。自分でも書ける、と思ったのは、家に帰ってからだだった。

食事を済ませ、江実を残してリビングを去り、自室にこもる。居馴染んだ空気に浸り、過ごした一日を思い返す。頭によぎってくるものがあつた。パソコンを立ち上げ、昼間見たサイトを開く。投稿されているいくつかの作品に目を通し、「これなら、俺にも書ける」と、同じことを考える。作文をするためのソフト、テキストエディターは持っている。手遊びだった。

ところが、処女作と呼ばれるのかもしれない小説を書き始めて、ろくに推敲もせず、同じ投稿サイトにアップロードした時、六時間を一心不乱に過ごしていた。風邪をひいたときとおなじ熱気が肌を敏感にさせて、頭をはしらせている。自分の作品にほかの利用者

がどんな感想を寄せてくるのか、気になって仕方がない。普段ならもうとつくに寝ていてそろそろ目を覚ますぐらいの時間に、腰をしつかりと落ち着けて画面にくぎ付けになっていた。

大学に文芸サークルでもあり、自分の三年間をサークル活動に注いででもしていたら、そんな欲求はなかっただろうか、と、考えることがあった。しかし、それはもう選択できないことであるから、和泉はこうして、身をやつして、投稿を続ける自分を往なさなくてはならない。

おそらくは自分のことを書きたいのだった。自分の条件をいかに克服するか、空想の世界でも書いてみせたいのである。だから、書けないでいる限りはそこから抜け出せない、はずである。しかし、そんな思いを引きずりながら、和泉がキーを打つのはまったく別の話だった。いま和泉が取り組んでいるのは、奈良時代を舞台にした下級貴族の、子供の友情だ。その話は読みようによつては、自分のことが書かれていると読めないこともなかったが、贋作なしに判断するなら、やはり、一義的な問題としては扱われていない。しかもそうしたお話を書くことは、この作品でもう五作目なのだった。

小説の問題と、自分のなしていることの不可解さに悩まなくてはならなかった。「これは、違う」と、声に出すこともあるのだった。江実が働いて、自分が不可解な取り組みを続けていることは和泉にとつて苦痛でさえある。どこかから浸潤してくる苛立ちが、確かなものになっている。和泉は器用にその感覚を処理して、往なしている。それでも、創作の引力にとらわれている限り、往なし続けなくてはならない。風呂にはいり、湯船に身を沈めて、「そういえば」と考えるとき、寝る前の三十分を予定してやらなければならぬ。退屈な講義に倦んで校舎の窓からユリノキを眺めたとき、葉の照らされた具合をノートの端に書き留めてやらなければならぬ。そんなこまごまとした欲求を無視したなら、もう自分はどこかの時点でずっと沈んでいってしまう気がしてならなかった。

和泉は、自分の行いを姉に話すことにした。免罪符が欲しいのだった。二週間前、ようやく覚悟を決めて、リビングに居座った。

休日の午前で、洗濯機を回しながら、昼の用意をしているときだった。和泉は莊園制度下の生活を研究した本を開き、江実を後ろから眺めている。最近買った本をわざと持ち出して、話の種を誘ったのである。

「小説？」

と、言って江実は首をかしげた。

「小説ってどんな？」

「いま書いているのは、奈良時代の話」

「奈良時代？」

きざんだ玉ねぎをなべに放り込んで、江実は正面に座る。一仕事終えた様子で腕をたらし、背もたれに細い上半身を預ける。恐れに似た慎重さが、表情に浮かんでいる。

「おもしろいじゃない。みせて御覧なさい」

「まだ書き始めたばかりだし、すぐに飽きるかもしれない。ま

あ、息抜きみたいなもので、物理の専門書を読む合間に、ね、いい気持ちの切り替えになるんだよ」

「どんな話なの？」

「これといった筋書きはなくて、おぼえた知識をただ脈絡なく書いていく感じ」

「それじゃ、つまらない」

江実は形だけ身を乗り出した。慎重さがまだ残っていて、和泉を見る目にも感情が含まれていない。それが姉弟だからこそわかる、警戒心であることを和泉は知っている。親の血が、弟の中に現れ始めたのではないかと疑われているのだった。

お互いにそんなところがあった。相手に伝わらないように気をつけながら、果たしてこれは何かの兆候じゃないかと、慎重に身構えている。それを気づかれていないと、これもまたお互いに考えているらしかったが、誤解かもしれない。

それで、小説の魅力を夢中で話しでもしたら、そう思われると知っていた。だから、和泉はそれを払拭してやらなければならない。自分がおかしなところに迷いこんではいけないことを、話さなければならぬ。母親がそうであったように、何かの拍子に果てしなく脱線していく自分ではないことを、自分のためにも確認しておかなくてはならない。

「このあいだ、研究のことを調べていて、偶然見つけたんだけど、自分で書いた小説を投稿して、公開するサイトがあるんだよ。そこにちよつと投稿してみようと思ってさ」

火にかけたなべが沸き、蓋が音をたてている。その音に気づいていないことが、江実の疑いを意味している。お気に入りのエプロンをつけ、スウェットの袖をまくり、はつらつとした格好で台所仕事に熱中していても、和泉の言葉にはそのぐらいの意味があるらしかった。それが最終的には、確認すべきなのは言葉でなく、行いにあることも和泉は知っている。

「ただの息抜きです」

と、もう一度言った。

江実は「小説ねえ」と、話を振り出しに戻して、両肘をつく。顎を寄せまぶたを伏せ、弟のきまぐれを吟味する。

「まあ、お姉さんに見せて御覧なさい」

と、事実関係をつかみにかかる。

和泉は反発とひそかな不安を抱えながら姉を自室へ案内する。自分より四年だけ長く生きている姉が、あるいは和泉自身ですら気がつかなかった錯乱を、書きかけの小説の中から見つけるのではないか。なんてことのないお話の中から、引き返しようなない精神的な断層を感じ取るのではないか。部屋の奥深くに侵入し、モニターの前に操作を始めた江実から、緊張の匂いが漂ってくる。

「そのファイル」

と、指図する和泉に頷いて、江実は展開したファイルに早速、目を通し始める。

「まだ、書き始めたばかりだから、あらすじみたいになっているところがあるんだけど……」

江実はまだ一度頷いてから、和泉を遠ざける。邪魔をしないようにベッドの上に横たわり、大きく息を吐く。獲物が焚き火をまえに解体されている気分である。

だんだんと、姉の体から緊張感が霧散していくのだった。それで、和泉は仕返しじみた思いから江実の体を見た。二の腕と太もものあいだから、胸を膨らませたスウェットが張っている。この姉が男を知っている、と日常から刷り込まれたセリフが和泉の中を反響する。会ったことのない、芝田という男の顔が様々な形をもって現れてくる。もう、正式に挨拶をしてきてもいいはずだ、と考える。まだ来ないのは、芝田の誠意がもっていないことを意味しているのではないか、それとも姉は、結婚について話したりはしないのかもしれない。それなら、まだ自分の心は落ち着くのに、と、視線を胸元から首筋、横顔のほうへ移していく。

気がつくのと、読み終わった江実がこちらを見ていた。和泉は動揺して目をこすって見せ、眠気に襲われていたと見せかける。

「いつ完成するの？」

「さあ……？」

「なんで奈良時代？」

「工学と全く関係ない方が、面白いかと思って」

「その……」

と言いながら、江実の本棚に並んだ古書を指す。

「最近買っていた古い本は、ぜんぶこれを書くために集めたわけ？」

「それもあるけど、どちらかといえば、ただ息抜きに読むのが楽しいからかな」

「それにしても、気合が入ってるじゃない」

そういって、江実は笑った。肩を悄気させ寂しいような呆れたような笑いだった。それで和泉は解放された気分になり、上半身を起

こして饒舌に話し始める。

「工学をやっている、どうしても行き詰るようなことがあるんだけど、そんなときに、歴史の本とかを読むと、視野が解放された気分になる。狭苦しくって、厳密なものを考えていたのが、急に民衆が、とか法令がとか、漠然としていて、それで事実をさぐりさぐりたどっていくような文章に触れると、僕も楽になる。仕事をやっていて、そういう時ってない？」

「あるけど、古書をそろえたりまではしない」

「それは僕の性格でもあろうけど。江実の場合は、もっと大雑把だから」

「大雑把なのが、私の生きる知恵よ。和泉君も、もうちよっと大雑把にやんなさい。そのほうが続くのよ」

「そういうものですか」

江実は立ち上がり、「洗濯が済んだ」といって、部屋を出て行く。

「それで、小説を読んだ感想は？」

和泉が後ろ姿に声をかけると、「面白いじゃない、やってごらん」と、姉の声が遠のいていく。いたぶるようなおかしさが込められていたが、本心はわからなかった。

免罪符を獲得してから二カ月がたった。奈良時代を舞台にした小説は行き詰っていた。通学の車内、帰宅してからの入浴時に、話の筋書きを思い浮かべていても、たどるべき道筋が思い浮かばなかった。息抜きの息抜き、そんな思いで、まるで違った作品に手をつけさえした。息抜きの息抜きである作品は、和泉自身が意図したものよりも、いくらか暗い、駄々をこねるようなものになった。

軽食店でその作品を推敲することがあった。用事がある、と友人の誘いを断って、通学路から離れた店でひとり昼食をとりつつ、印刷したものに書き込みをしていた。店内の一番奥、窓から覗かれる心配のないところで居座りを決め込み、文章の瑕疵に集中してい

た。そうした時間を幾日か過ごしても、見直すたびに文章の浅さが気になって、大幅に書き直すはめになる。

ある日、そんな推敲を一時間ほど続けて、ふと、昼からの講義に遅刻したことに気づいた。まえからそれだけはないようにと気をつけていたものだったが、いざそのようになってみると、たいした動揺はない。「ああ、そうか」というほんのわずかな感慨だけで、推敲を続けようと考えた。その講義が重要なものではないという予備的な知識よりも、作品に大々的に手を入れる必要があるというこのほうが、強く作用したようだった。

再び紙面に顔を落とそうとしたとき、店の入り口に、見覚えのある男が入ってきたことに気がついた。それが誰であったかしばらく考えて、姉の交際相手だと思いつく。気づかれないように身を隠す、などとはできない状況である。和泉は机に広げた小説だけはどうにかしまいこんで、芝田に視線を返す。確かにこちらを見ていたはずだったが、芝田は近づいてこない。通りに面した席を眺め、そちらに座ろうとしている気配である。

和泉の中に、これは白昼夢なのではないかという疑いが突然わいた。芝田がこんなところに現れるなんて、ありえるのだろうか、目に映る現実から離れて疑ってみる。左手を乗せた通学用のかばんの感触は確かである。革ののっぺりとした冷たさを感じられる。店内に響く食器の音、どこかのテーブルの話し声、空調の湿った冷気、どれも確かからなかった。それでも和泉は冷や汗をかいていた。抑えがたい寒気があった。現実を見失うのは、恐ろしいことなんだといまさらながら気がついた。

一つ一つ確かめなければいけないという気持ちで、和泉は自分から声をかけた。すると、芝田はすぐにこちらを振り向き、近づいてくる。気づいていたのかもしれない。

「和泉くん」

「こんにちは」

芝田はちよつと躊躇した後に対面して座り、「意外なところで会

うね」と、顔をほころばせて、ジャケットを脱ぐ。下手に出られているような手ごたえのなさを感じる。

「この辺りにお勤め先の会社があるのですか？」

「いや、商談でたまたま来たんだよ。君は確か、そうか、大学が近くだったな」

芝田の目が一瞬、ぐるりとめぐらされた。

「姉がお世話になってます」

と、和泉は通り一遍の言葉をかけた。芝田はそのままの表情で頷いて、特に言葉を付け足さない。

「大学は楽しい？」

「ええ、まあ」

「そうか、そりゃ、いいことだな」

「仕事は楽しいですか？」

「仕事が？ いや、それはどうだろうね。充実はしているが、楽しいとは違うな」

「それは残念ですね」

なに？ というように芝田は首をかしげた。ちやうどウェイターがやってきて、席に着いた芝田に注文を促していく。

「楽しかったほうが、やっぱりいいでしょう？」

「そりゃ、そうだが、仕事はそういうもんじゃないよ、その発想は、若いよ。あえて言うなら、楽しいじゃなくて、面白い、かな」

「どう違うんですか？」

「楽しいは無邪気な喜びで、面白いは、深刻な喜びだよ」

試すような気取った口調で芝田がいう。和泉はようやく自分を取り戻して、普段からの芝田への反発がよみがえっている。

「深刻な喜びなんてあるのですか」

「和泉さんはまだ感じたことがないか。深刻な喜びというのは、どう説明したら…、そう。退けない状態で困難に取り組んでいて、それが自分の行いによって、思ったようにも、思わないようにも事態が進んでいくのを感じるときに、人が、心の中で感じている感覚

のことだ」

芝田は配膳された定食に箸をつけて、うまくもなさそうに食べ始める。

「専攻は確か、超電導のなにかだったね？」

「ええ、素材となる金属を見つけて、温度を調整したりしてます」

「おもしろい。いい材料が見つかったら、うちのような会社が、製造販売権を高く買い取ることになるかもしれない」

「芝田さんの会社で、電線だとかも扱っているんですか？」

「そりゃあ、その手の専門商社だからね、超伝導線は、有望だよ」

和泉は豚カツを切り分けて口に運ぶ芝田を見ている。別に不快な食べ方ではない。しかし、どこか卑しさが滲んで見える。それは芝田に対する疑いがそうさせるのかもしれない。というのも、和泉には目の前にいる男が、将来姉の夫となつて一緒に暮らす、ということとをまるでイメージできないからだ。

それが、姉妹の恋人に対して誰でも感じる種類のことなのか、それとも芝田という男に対する自分なりの判定なのか、どちらであるかはわからない。しかし、和泉には、芝田が、自分たち姉弟のかかえている負い目というものを、受け止めて平然としていられるかどうか疑わしく思えた。

恋人の弟と街中で偶然会い、そうして豚カツ定食を食いながら、ちらちらと目を合わせて綻んでみせる芝田に、そのような哲学が養われているようには見えなかった。姉が病気を恐れて、子供を作らない、と宣言したとして、それを受け入れる男には見えなかった。偏見かもしれないが、和泉の確信だった。ひよつとしたら、自分に何かあらかじめ伝えておきたくて、わざわざここまで来たのかもしれない、そんなことまで考えた。

次第に暗鬱な気が胸中において、座っているのが鬱陶しくなってきた。幸い、なのか芝田は勢いよく飯を平らげて、仕上げに茶をすすっている。

「今度、どこか遊びに行こうか？」

と、伝票を見ながら芝田が訊いてくる。

「姉と三人でですか？」

「いや、男同士、釣りでもさ。悪くないだろう」

「いいですね、ぜひ」

「釣りはしたことがある？」

「防波堤で投げ釣りくらいなら」

「防波堤か。釣りの醍醐味は、やっぱり沖釣りだよ。教えてあげるから、予定を決めておいてくれ」

「姉に伝えておきます」

和泉が答えると、芝田は満足そうに頷き、「じゃ」といいながら、和泉の伝票もつまみとって立ち上がった。遠慮する間も与えずに、頭上でそれを二三度振って、レジへと進む。通りへ出たときに、もう一度店内の和泉を見て笑ってみせた。

(芝田は、おそらく姉を捨てるであろう)

息抜きの息抜きを仕上げながら、和泉は自分の体に流れる血の咎を思わずにはいられない。それから、手元の小説がいつしかそんな思いを反映して、とげとげしいものになっていた。それ以上推敲を重ねたなら、ただ憎しみだけの作品になってしまいうさだだった。

画面に熱中して、深夜近くまで真っ暗な部屋でキーを叩いていることがあった。早く吐き出さなければ、という焦燥感に憑かれて、翌日の授業を投げてまで続けていた。自制しなければいくらでもかじりついている。

「これは趣味であるから、授業に影響を及ぼしては、だめだ」と、割り切ってみるが、机の隅の写真立てが目映り、「もう少し」と、照明を再び点けてしまう。家の前に立つ外灯から光が入り込んでいて、父親の笑顔の、皺の陰影が見えてくる。血に抵抗するとう思いは、怨念との戦いじみていた。

免罪符を得てからも創作意欲を往なす努力は続けられていたけども、苦しいところはもっぱらそのあたりに据えられているのだっ

た。

江実のほうでは和泉があまりにも熱中しているので、いったいなにをそんなに時間をつかっているのかと不思議がついて、最近では仕事から帰るなり和泉の部屋までやってきて、眉間にしわを寄せモニターを覗き込んでいく。果たしてそれほど面白いものなのか検分したいらしかった。なにも如何わしいサイトにアクセスしているわけでもないの、和泉にしてみれば集中が削がれるものではあつたが、家主でもある姉を隣に、概要を話したりもする。

帰宅するなり、駆け込むようにして部屋までやってくるのがあつた。スーツを脱ぎかけのまま、なにかあせつた様子でまっすぐに来たのだった。電車の中で何か思いついき、不安にとらわれて、和泉のいるこの場所まで駆けてきたのかもしれない。けたたましいノックの後に部屋のドアだけは丁寧に開けてみせて、「なに？」という弟の表情を廊下からしばらく見つめた。暗がりの中に立ち、表情は見えないが、こちらを見ていることだけは判別できる。姉の体から、乱れた息がしばらく漏れていた。

「またか」

と、江実は一步踏み込んで、「問題なし」というように笑った。

「まだ、飽きていない」

「なかなかハマっているみたいね」

「いい息抜きになっています」

「いまもなにか書いていますところ？」

「いや、投稿サイトを見てる」

何を見ていたか説明すると、江実はどう飲み込んだらいいのかわからないらしく、鸚鵡返しにつぶやいた。

「小説を投稿するサイト」

「そう。場を提供して、利用者を集めて、管理しているほうとしては、企業の広告を募って収入を得るといった按配」

「企業の広告？　そういう需要があるのね」

「関心のある人間を一網打尽にできるから……」

そういうながら和泉は利用しているサイトにアクセスして、インデックスページを表示して見せる。引用された最新の投稿作がタイトルとともに表示される。

「けっこう投稿されているものね」

「平日は五作品ぐらい、休日は多いときで十作品ぐらい投稿される。もちろん質はまちまちだけど」

「どれか一つ開いてみてよ」

「投稿作を？」

江実に促されて、和泉は画面をスクロールする。しばらく利用の途絶えていた利用者が久しぶりに投稿している。瞬間的にその利用者、ハンドルネーム@K_tanikoへカーソルを移動させる。

「読むの？」

と江実に訊くと、頷きながら和泉を押しつけ、イスの上に尻を寄せてくる。

タイトルは『四季の楽譜』。@K_tanikoの好む、感傷的な文面である。大学の文芸部に所属していて、同人誌も出しているというだけあって、文章はこなれている。和泉はそうしたことを、サイトの掲示板、情報交換スペースを読んで知っていた。

小学生の「彼女」が、周囲の成長していく様子についていけず、やがて変化そのものを憎んでいくようになる。天気の違いや、植物の生長、四季の変化までもが自分に敵対していると思うようになる。やがてゆるやかなながらも自分自身が成長していくことに気づかされたとき、あまりの閉塞感から昏倒してしまい、「普通の生活」が送れなくなる。そんな「彼女」がゆいいつ落ち着いて時間を過ごせるのは、祖母の家で、その古い木造住宅でしばらく静養することになる。一見変化のない祖母の見た目と、時が止まっているかのような家の中の様子に癒されて「彼女」は少しずつ回復する。両親や医者には話せなかった自分のこだわりも、祖母には話すことができ、同じ話を何度もしなければならぬ手間はあつたものの、

良き理解者となるのだった。ある日、好奇心に駆られてダンスの中をあさっていた「彼女」はそこから古い写真を見つける。モノクロの写真で、四脚門の前に祖母らしき女学生と知らない男性とが写っている。男性がはたして祖父であるのか「彼女」にはわからない。確かめようと祖母に見せると、祖母は憮然とした表情を浮かべるが、何か思い出したのか邪険に扱いながらもタンスの奥へしまっておこうとする。「彼女」はその様子を見て、祖母は過去に変化の中に生きていて、いまでもその延長に生きている、と考えて、憎しみではなくはつきりとした嫉妬を抱く。

「うまいじゃない」

スクロールが終わると江実がいった。和泉も、これならばどこかのコンクールにも出せるだろうと思った。その後の「彼女」のことは気になるが、嫉妬を抱いたところで終わるほうが話としてはまともまっているようである。物語にぶれがないことも好印象だが、映像を感じさせる室内の描写も丹念で、性格を感じさせた。

「たまに投稿する人でね。たぶん同じ年くらいなんだけど、なかなかうまい。ほかの利用者からも褒められている」

「この谷子っていうひと？」

和泉はうなずく。

「女の人？」

「そうだと思うんだけど、本当のことはわからない。SNSでもやっていれば察しがつくんだけど、ここでしか使ってないペンネームみたい」

「じゃあ、この人のこと検索したんだ。興味があるんじゃない」

と、江実はからかってくる。

学生どうしの飲み会でも、同窓生の女に何かの話で、そんな皮肉かあてこすりをされることはあったけども、江実のそれは社会人だから、面白がるだけではなく性に関わる何か潜んでいるようである。脱ぎかけのワイシャツとスカートというあられもない恰好では

あるが、年上の存在を感じさせられて和泉は赤面した。

「メールアドレスとか登録するんでしょう？ 何か連絡取ったことはあるの？ 声かけてみれば？」

「そういうことをしたいんじゃない。それに、そういう利用者はみんなに敬遠されて、感想がつかなくなる」

「堅いわね。なんなら私が仲を取り持ってあげましょうか」

「どうやって…、余計な」

「でもそんなことをいつてちゃ、創作志望者どうし知り合うこともできないじゃない。あんたはちよつと真面目すぎるところがあるんだから、ウェブを使うときぐらいは軟派なほうがいいでしょう」

「そういう出会いは、このサイトの運営主旨にないんじゃないかな。創作が好きな人のウェブ上での受け皿になるっていう真面目な目的と、あとは、管理している人自身が、書くのが上手な人たちとのコネクションを作りたいとか、そういうものなんだと思う」

「ずいぶん遠まわしね」

「たしかに。でも、ホームページのようなところで細々とやっているよりは、機会が増えるんでしょう。まあ。僕には本当のところはわからなくて、想像して言っているだけだけど」

「なににせよ、人と人が知り合うって、重要」

「経験談か。芝田さんとは順調？」

「生意気な」

江実はやややかな目と、笑った口元を見せてデスクを離れる。

「そういえば」

と、和泉はそれを呼び止めた。

「このあいだ、講義の間に喫茶店で時間をつぶしてたら、芝田さんに会った」

「へえ。どこで？」

和泉は最寄りの駅と、店のだいたいの住所を伝える。

「そのあたりなら、偶然会ってもおかしくないかな。何か話したの？」

「挨拶して、同じテーブルで食事しただけ……、それから釣りに誘われたけど」

「釣り？ 一緒に行こうって？」

「はい。江実も一緒に、って答えたけど」

「それだけ？」

と、江実は怪訝な顔をする。問い詰めるような鋭さが滲んでいた。

「それだけ。釣りは沖釣りがよかろう、って最後にいっていましたが」

「偶然居合わせたって？」

「そうはいってなかったけど、初めは僕に気づいていない様子だった。だから、声をかけて、テーブルまで呼びました」

ふうん、と言って、江実は近づけた顔を離した。和泉の性根を見据えて、見開かれた黒い二つの穴が、焦点を失ったまま向けられている。

うまくいってないのか、と訊こうとして、和泉は口をつぐんだ。代わりに掛けた言葉は、以前聞いた、先方の両親にあいさつをするという話だった。「挨拶？」と、再び江実の表情に疑いが走り、それから合点が行ったのか、眉間から口元にかすかな柔らかなさが浮かんできた。

「そう。服を買った方がいいのかしら」

「いつも通りがいいんじゃないの？」

「男はそれでよくても、女はそうもいかない。あちらのお母さんだって、私が型の崩れた服を着ていたら、おかしい人間だと思ってしまうように」

「挨拶はいったったつけ？ 八日？」

「もう少し時間を下さいって言った」

「どうして？」

「服のこともあるし、まあ、いろいろ……。なんなの、さつきから、うるさいわね。ご飯は？ まだ？」

と、こんどは明らかな笑みが姉の頬に現れて、和泉は正しい答えを見つけた気分になる。

「まだ。腹減った」

「そう、気の毒に。イノシシ狩りにでも出かけなさい」

ブラウスのボタンに指を掛けて、江実が部屋からでていく。スカート生地を軋ませる音だけが聞こえている。

九時半になっていた。和泉は階下へと遠ざかる姉の存在を感じながら、何となく@K_tanikoのIPアドレスにカーソルを合わせる。

『2001::mk7:tr5f:6ise』と、カーソルの下に固有のナンバーがポップアップした。

江実にけしかけられたせいなのか、和泉はどうすれば@K_tanikoと個人的な連絡が取れるものか考えるようになった。アルバイトでホームセンターのレジに立っているときにも、なんとなく客の顔を眺めて、この人が谷子だったらいいのに、とか、これが谷子だったら、どうするか、などと妄想したりしている。

『四季の楽譜』は当然、創作でしかない。それは和泉にもわかった。それで、はたしてああした話を書く人が、どのような思いでいるのか、それが知りたいのだった。だれしも越えがたい問題を抱えてその場所でもがいているものだと、思いたいのかもしれない。

作品のなかでは結末は暗転のようなもので、「彼女」その後どうなったものか示されていない。『四季の楽譜』が何かの文脈に基づいているとしたら、「私」の現在はいかなるものだろうか。そこがまさに書かれるべきことであるように思えた。いままで投稿されたほかの作品とは違い、物語の背後に作者のメッセージがあるようだった。だから、和泉は谷子にこだわった。なにか、作品の無邪気さについて責めたいような気持ちさえあった。

@K_taniko がはたして自分の考えているとおりのユーザーであるのか、それを知るにも相手に話しかけなければならぬのだが、いままでそうしたことをしたことがないから、相手を不快にさせない

やり方を知らない。突然話しかけるのはやはり無作法な気がした。自分がなにか作品を投稿して、それに@K_taniko が感想を添えてくれ、というのがもつとも自然な気がするが、書きかけのものは一向に進んでいない。意を決して、@K_taniko の作品に感想を寄せてみたが、通り一遍の応答があっただけだった。寄せた感想文の平凡すぎる内容のせいかもしれない。

和泉はつい最近になって仕上げた、「息抜きの息抜き」を投稿しようと思いついた。それは必ずしも@K_taniko の作品に応えられるものではなかったが、すくなくともテーマに似通ったところがある。

データのはいったフラッシュメモリーを認識させて、フォルダーのなかから、作品を切り取る。一度それを展開させて、最後のチェックをする。誤字脱字がないことを確かめ、投稿のボタンをクリックする。すぐさま作品投稿欄に自分のハンドルネームである

@Izumi が表示され、その横に作品名『地下水脈』と書かれる。

かつて風土病とも呼ばれた公害の地を出身とする山木は、首都近郊で塾の講師をしている。親族の何人かもその病でなくして、自分自身、いつ発症するかと怯える日々を送っている。司法の認定などもあり、わずかだが、補償金をうけとっている。しかし、失ったものは健康ばかりではなく、一般的な人間としての尊厳も含まれている。差別があるのだった。

それは山木が就学や就職の際に提出する履歴書から発覚する。教務課や総務課からいかなるルートで漏れ出すのかわからないが、ある日ふと自分を指差す、見知らぬ人間に気づかされるのである。

「あいつは、いまに四肢をねじらせて、昏倒するぞ……」という声が、聞こえてくる毎日である。

新天地を開き、履歴書からその過去を消せばいいのだが、山木はそれを良しとしない。それは、苦しんで死んだ者たちを否定することに思えた。これから彼らと同じ運命をたどるかも知れない自分

が、彼らを否定することは、罪であると感じられた。おそらく、よし悪以上に、それをできないに違いなかった。

山木を差別しない人間もいる。同じ塾講師である野地と、塾長の関島である。関島は山木が公害の地を出身として知っていることを知っていたが、彼を常識的に迎え入れた。野地は、指差した同僚の誰彼を殴ったことさえあるのだった。山木は度重なる差別によって自身にケガレを感じながらも、かれらと言葉を交わすことで、生活をおくれている。山木の人生には諦めが寄り添って流れている。

ある年、新たな講師として高内が入社する。格別な美人ではないが人好きのする明るい性格である。山木、野地、高内は歳が近いこともあり親しく付き合うようになる。互いの家を訪問することもあり、高内の実家では、その両親と知り合いさえする。山木にはそれがもつたいたいことに思え、また、いつか破綻するかけがえのない時間であることを自覚する。

やがて野地と高内の結婚が知らされた。山木はその知らせを驚きもなく迎える。当初は高内が、自分に気持ちを傾けていたのを知っていたが、それもまた、一時期の夢、自分の体に穢れたものが潜んでいることを知らないからのことだと、諦めていたのである。そうやって高内の思いを避け、野地の男気を伝え、二人を祝福したのである。

披露宴のあと、山木は塾長の関島と帰路をともにしていた。耐え難さがあったのかも知れない。山木はこの何ヶ月かの思いを関島に話す。関島はじっと聴き入る。最後に、そんな人生に耐えることに意義を見出すのが自分の人生である、と山木はいう。関島は、「俺はおまえに戦って欲しかった」と、答える。「おまえが心まで負けていくのが悔しい。そうやって、高内というよき相手を譲ってしまったのが、本音を言えば、残念で仕方がない。人間が、寂しいものだと感じてしまう」

関島が泣いていることに気づき、山木は自分もついに、逃れられない業病を発症したのだと考える。

投稿してしばらく時間がたつと、感想がいくつか寄せられていた。否定的な意見が多いようだった。「暗い」「不快だ」というコメントもいくつかあった。それではいかなる話なら、よかったのかと訊きたくなるが、山木と同じで、和泉自身もどうせ話しても理解はされまいと思った。

和泉は谷子の意見を待った。それだけが聞きたくて投稿したのである。しかし、いつまで待っても、谷子の感想は投稿されなかった。まったく感心できなかったのかもしれない。そんなことを考えているときに、ふと江実の顔が浮かんだ。途端に、罪を犯した、という慄きが、指先にまで鋭く走った。罪の黒い血液が全身の隅々にまで流れ込んだようだった。わが身の愚かしさが耐え難くなってきた。

残暑の只中だった。アルバイトを終える午後九時過ぎに外に出て、熱気の名残が足元から上ってくる。雨の少ない年で、街灯に照らされる街路樹は葉を垂れて苦しげである。湿気なのか汗かわからない水分が、服と肌にまとわりついてくる。和泉は客の自動車がなくなり、がらんだうになつた駐車場を横切つて、隅に停めた自分のバイクへと歩いていく。店の前の通りには数台の車が列を作っていて、信号が変わると、それも視界から消えていった。

車の去つていった先には、幅の広い河川と、それを渡す大橋とがある。和泉は思い立って、川面を眺めに歩くことにする。駐車場が施錠されるまではまだ時間があり、水気を感じるにはちょうどいいように思えた。

夜の川面は真っ黒で、街灯と月の光を反射して波打っているのがわかる。水は河口のほうへゆるゆると流れていた。海から風が吹いていて、潮の香りがする。浜辺の狂騒のあとの静けさが、そこから運ばれてくる空気に含まれている気がした。

蒸し暑さは相変わらずで、そこに塩分を含んだ風を受けているの

だが、無風よりはよほど快適だった。うまい具合にベンチがあり、腰を下ろす。流水が岸壁をなで、そこに囲われた気体を破く音が聞こえてくる。

誰かに相談してみたい気持ちはあった。相談する相手がいなくてもよかった。学友の何人か、先輩である高坂や林などは、打ち明け話ができる関係である。あるいは同じ研究室に所属する三津橋という女なら、親身になって相談に乗ってくれるのかもしれない。それでも、こればかりは、遺伝的な精神の病のことは話す気になれなかった。

自分で書いた『地下水脈』の主人公は、履歴書に、自分の出生、公害の地の生まれであることを隠さない人間としたが、書き終わって感想のいくつかをうけると、やはりそのことで不幸となったと思えた。暗く、敗北の確定した、無益な戦いを挑んでいるようだった。それくらいなら、自分とかかわりのないことのようにして、気楽に過ごしたほうが得ではないか。江実のように、ひたすら他者のうちに飛び込んで、何かそういうこともあるんだというくらいの大雑把でいるほうが、幸いなかもしれない。

(そうやって生きることが出来るだろう)

と、和泉は思った。いつか違ってしまうときが来るとしても、その時には自分自身ではもう、何もわからないのだ。

(それが運命なら、俺の人生はなんと虚ろなのか。うれしいこともかなしいことも、なんの甲斐もないんじゃないか)

両親が亡くなったときに、自分を憐れんで泣くことはやめると決めていた。だから、両腕をつかみ、身をちぢませるだけで辛さに耐えた。

路面に何かを引きずる音が聞こえ、和泉は振り向いた。シルバーカーを押す老人だった。風の音が耳をなぶっていたので、もうよほど近くまで来ていた。イスに座ってなにをしているでもない和泉にたいして一瞥を送り、そのまま通り過ぎていく。

(家に帰ったら、家族が待っているだろうか)

そんな想像をすると、無性に江実の顔が見たくなった。目当ての人間に感想ももらえない、愚かしい創作を投稿したことへの後悔が心の中によどみ、蝕んだ。

和泉はしばらくして駐車場に戻り、往復に使う原付バイクの前で投稿サイトのチェックを始めた。サイト上では@Camelliaという利用者が最新作をアップロードしていて、他の利用者の感想が六つ付いていた。前回の@Camelliaの投稿は憶えていた。さらにその前の投稿も。構成に気を遣って通俗的な話を書くことが好きらしかったが、その文章のどこか無機的なことが気に入らない。苦しさを知らない人間が垣間見えた。

枚数は普段よりも短い、八千字ほどだった。原稿用紙二十枚分のデータを携帯端末にダウンロードするのは容量が多すぎるので、急いで帰ることにする。

江実が帰宅しておらず、一階のリビングに照明はついていない。芝田と会うことが増えたのか、休日でも江実が家で時間をつぶしていることは少なくなっていた。平日の夜も、同様に帰宅が遅い。いまだに夕食を自分で用意しないのは、意地というよりも惰性かもしれない。

スペアのキーでカギを開けて、そのまま窓際に置かれているパソコンの電源をつける。冷蔵庫をあさり、江実の食べ残しである六ピースチーズをいただいて、ビールとともに机に並べた。

目当てのサイトにアクセスすると、寄せられた感想の数が倍になっている。@Camelliaの新作タイトルは『夜半の寢覚を手にする』である。王朝文学がベースらしい――。

国文学の研究者である「私」は古典の研究では同世代に引けを取らない自信がある。年は四十になるが、まだまだ若手で通じていて、テレビや雑誌での露出も多い。内面も外面も磨き、文学研究の裾野を広げることが自分の使命のように感じている部分があった。

あるとき、京都の旧家の蔵から『夜半の寢覚』の六巻本が発見さ

れたことを知る。『夜半の寢覚』は平安期の王朝文学として有名ではあるが、残っている五巻本、三巻本ともに話の半ばと結びが失われている、他の完本のものに比べると論文は少ない。その失われた話が書かれているであろう六巻本が発見されたとあって、世間では騒ぎになる。

当然自分がその調査を依頼されるはずであると思っていた「私」は、しかしその依頼がライバルともいえる鴻池に通知されたことを知る。抗議する相手も見つけられない状況の中、「私」は共同研究にできないかと鴻池に持ちかける。鴻池はそれを快諾し、依頼主に相談することを約束する。

日が過ぎて、待ちきれない「私」は再び鴻池に連絡を取る。依頼主が「私」の人柄を知りたいといっているから家まで来いという。「私」は喜んで依頼主の家に向かうことにする。妻には「菅原孝標女の心を八百年ぶりに知る人間になれる。そんな気持ちだけの子供っぽいことは君にしか言えないが」と喜びを漏らす。事実、いつになく若返ったかのように力が湧いているのを感じる。

依頼主の家には鴻池も来ていて、二人を前に「彼女」は質問をひとつとする。「あなた方がこの本を研究することで、世の中はどう変わっていくでしょう？」

いつも通り、後学に資するところがあると熱弁する「私」。そのあとに口を開いた鴻池は「ただ、僕の好奇心が満たされます」と答える。「私」は驚く。普段、理論的な論文を書く人間である鴻池が、いつになく率直な答えだからだ。まるで自分の気持ちを代弁されたかのような気分になり、はたして自分も素直に答えればよかったものか、と考える。結局、依頼主は二人に研究を任せることにする。「どちらも気に入らない答えですが、見守るぶんにはおもしろいわね」それが返答であった。

最後のシーンでは、六巻本の『夜半の寢覚』を前にして、「私」と鴻池は無心に解読をしている。

一読して、@Camelliaの意図がどこにあるのか和泉にはつかめなかった。しかし、繰り返し返して読むたびに、字面の背後に何かの感情が含まれているような気がしてならない。人の投稿作を二度三度と読むことはまれであったが、『夜半の寢覚を手にして』にはそれだけの魅力があるようだった。

自分でも感想を書き込もうと二三の欠点や不明点を起こしてみるのが、読み込みが浅い気がして、感想欄に書き込む気持ちになれない。

ほかの利用者がどんなようにとらえたか知ろうとして、和泉はサイトの情報を更新した。感想欄には@K_tanikoが文章を寄せている。はっとなって文面に目を走らせる。

@K_taniko——拝読しました。とても精緻でいて、古典の再発見という仮想現実が本当のことにように描かれているバランスの良さを感じ入りました。『夜半の寢覚』は知っていましたが、お話の内容までは詳しく知りませんでした。今回カメリアさんの作品を読んで、いったいどんなお話だったのかと、調べてしまいました。カメリアさんは博識ですね！とても勉強になったのですが、ひとつだけなんだか、足りないんじゃないかと思うところがあるんです。登場人物の一人である依頼主についてです。お話の流れのうえでとても重要なポジションにいると思うのですが、この人物についての説明がありません。なぜでしょうか？カメリアさんのお考えを教えてください。いただきたく思います。

@Camellia——ご感想ありがとうございます。常連の方に褒めてもらえ、うれしく思います。実をいうと、この作品は谷子さんの『四季の楽譜』に刺激されて書いたものです。この作品の依頼主である「彼女」は、『四季の楽譜』の「彼女」を想定して書きました。勝手なことをしていません。でも、創作を志す者どうし、そんなかたちで対話できることもあるかもしれないと思っています。

返事はまだであったが、和泉はこんな対話ができるものかと感心した。この@Camellia ぐらいに遠慮のない性格であれば、和泉にも谷子に近づけるものだろう。ようするにそのあたりが自分の不器用な部分なのかもしれない、と彼は考える。

たったいま返信がなされていて、この時間に@Camellia が同じサイトを见ているのは間違いがない。それで、和泉は彼を知りたく思い、インデックスページに表示される伝言板に、@Camellia をチャットルームに誘うメッセージを書き込んだ。

しばらく待っていると、期待通りに相手がログインしてきた。初めて言葉を交わす相手であるので、挨拶を懇懇に交わし、それからなんとなく相手の文章を気に入っていることを伝え、ようやく本題に入る。@Camellia はなんのためらいもなく応じてくる。作品性は作者の性格が十分に反映されたものらしかった。

@Izumi ——『寢覚』にでてくる「彼女」は、谷子さんの作品の『四季の楽譜』の「彼女」を想定したということですが、「彼女」の後年の姿ということなんですか？

@Camellia ——というよりも、人格だけ似せた別の人です。拙作の「彼女」も、過去には『四季の楽譜』と同じような経験をしていたかもしれませんね。

@Izumi ——なるほど。そうすると、これは、『四季の楽譜』が投げかけた孤立感にたいするカメラアさんなりのメッセージということですか？

@Camellia ——メッセージというところちょっと傲慢かもしれない。拙作のなかで「彼女」は息苦しい時期をうまく過ごして、あのせりふが言えるような、価値観、というか人格そのものを養って、そうやって生きてこられたということですよ。

@Izumi ——それを彼女に書いて見せた。気障ですね

@Camellia ——気障ではないよ。僕はあくまで創作上の刺激を受けたと思っっている。そこから谷子さんが何かをつかむというのは、僕

の本意とは違います。

@Izumi ——それでも、「彼女」を助けようとしているじゃないですか。

@Camellia ——それも含めて結果に過ぎないです。いずみさんのご指摘は、僕にはよくわかるよ。でもね、それは結局、文芸の本質とということではないでしょうか。

@Izumi ——読者を救うことができますか？

@Camellia ——救うというか、助けるというか。

@Izumi ——さすがにそれは極論です。

@Camellia ——どうして？

@Izumi ——どうしてって、それは、たとえばカメラリアさんが題材にした『夜半の寢覚』だって、ハッピーエンドにはなりえないじゃないですか。中の君もいい人生をおくっていない。不実の子を二人も生んで、望まない結婚をして、夫とわかり合えたと思ったら死なれる。あれを読んで救われることってありますか？ 古典作品からしてそんななのに、文芸の本質が読者を助けることにあるなんて、言えないでしょう。

@Camellia ——そうですね。あなたのおっしゃる通りかもしれませんが、い。こんなのはどうでしょう、中の君の多難な人生を知ること、読者は自分たちがまだ安穩と暮らせている事に気づき、日常を大切に考える。彼女たちは自分の生活に「棄てたものじゃないと思わせるようなのが残っている」と考えて、立ち返る。ほら、救われてるじゃないですか。そういう光みたいなものを見たいと思っている人には、そのように読める。お話の中にそういうところがあるか、ないか。僕はそれにこだわります。

@Izumi ——おっしゃっていることはわかりますが、そこまで多様な受け取り方を想定して、小説なんてかけません。

@Camellia ——そうかな。少なくとも、私はそういうお話を意識して書いた。その結果、谷子さんに限らず何人かの方から共感を得られました。私の書くものは未熟な作品ですけど、そんなレスポンス

をもらって、ちよつとずつ、いま言ったような作品性に仕上がって
いくんだと思っています。

@Izumi — 話がそれてしまったんですけど、私もやはり、谷子さんと同様に、「彼女」の人格が書かれていないことに不満を思いました。作者のカメラアさんとしては、その点についてはどのようなようにお考えなんでしょうか？

@Camellia — はい。そのご指摘はもつともだと思います。実は作者の意図としては、読者にそれを見つけて欲しかったんです。

@Izumi — 読者に。

@Camellia — うん。だから、彼女の人格が書かれていなくて不満、というのは、そのとおりだし、結果的にですが、欠点みたいになっちゃった。だけど、私の考えでは、それでよかった。わざと書かないことで、たとえば谷子さんは、そこから「彼女」の生きかたを模索してくれたんじゃないかと思うんです。いふなればそれこそ、この作品の本来の価値だと思います。

そこからは他の利用者が割り込んで、話は脈絡の無いものになっていった。あいさつを書き込んでチャットルームからログアウトする。もう一度『夜半の寢覚を手にする』を開いてみると、

@K_taniko からの返信が書き込まれていた。

@K_taniko — 驚きました。まさか私の拙作からイメージを膨らましていただけたなんて。なんだか恥ずかしいような気分です。でも、そうやってそれぞれの持つイメージを交換し合って、作品世界を作っていくのって面白そうですね。私も、カメラアさんの作品から、キャラクターを誰かもらっちゃおうかな。

和泉は一連の対話にもう一度目を通し、それからブラウザーを閉じた。@Camellia にたいする反感がくすぶってはいたが、どうやら教えられる形になったようだった。たしかに、直近で自分が投稿し

た『地下水脈』などは、だれかの小説の登場人物の一人でも採用していたら、ずっと違った雰囲気にならなくていいかもしれない。それに、他の作者が思いついたキャラクターは、和泉の創作するお話しになかにもあっても、一定の外部性、客観的な見方を持ち込むに違いない。それは『地下水脈』の暗さや不快さに一筋の救いのようなものをみせるかもしれない。『地下水脈』はすでに公開してしまったので手を入れようとは思わないが、まだ未公開の書きかけの作品がある。だいたい以前より停滞していた奈良時代の作品をクリックし、これまでの文脈を追い始めた。

もともとの筋である下級貴族の子供が友情を育み、やがて政争に巻き込まれ、より卑しい生まれの一方が身を犠牲にしてもう一方を逃す、というものを見直し始める。他の文脈を持つキャラクターを登場させることにする。そうして、そのキャラクターとの出会いによって、運命が変わることになる。どう変わるか。政争の難を逃れ、貧しいながらも夫婦や友人同士で心の通った家を築かせるか。それはどうも安易なようだった。そこには和泉が一義的な意味を感じている血の咎というものが現れてこない。

(血の咎からは、逃れられない)

和泉は大きく息を吸って上半身を反り返らせる。背もたれがしなり、後の景色が視界に入る。

(血の咎は、不幸ばかり作らなければならぬか)

そんな疑問もわいたが、わが身を振り返れば、重荷でこそあれ救いらしいところはない。

(いや、そうではない。俺はそもそも何もしてこなかった。しかし、なにかできることなんてあるか。病院にでも通えばいいのか。それは違う……)

再びキーを打つ手が止まった。ただキャラクターを増やしただけでは、和泉の思うような創作はすすまないうようだった。

秋の気配も訪れないまま、何日かが過ぎた。江実の外出が目立つ

て増えた。外泊することもあった。

「明日は芝田さんと箱根にいつてくる」

と、気軽に伝えてきた。和泉は訳知り顔で応じるものの、内心では江実が不幸になるのではないかと心配している。止めることも茶化すことも適当でない気がして、もやもやしている。そんな気持ちを抱えたまま、もういちど創作に向かい合うと、やはり筆が進まない。

芝田の家にあいさつに行くという話は具体的になってきたという。先方も早く会ってみたいといっているらしい。「和泉君も一緒に行ったほうがいいのか」などと、食事の時にサラダをつまみながら言ったりする。「行くよ」と、答えながら和泉は、先方ははたして江実のことを、こちらの家のことをどれぐらい知っているのか、と疑問に思う。

大学では高坂が就職を決めていた。林は博士にすすむといっているが、修士論文にてこずっているのだという。三津橋は三津橋のままで、就職するのか大学院にすすむのか、あいまいである。

和泉には高坂が就職するというのが意外だった。「研究職を目指しているんだと思っていました」というと、「養わなきゃならぬ」と答える。誰にも言わないでいたが、ひそかな付き合いがあるらしかった。

「結婚されるんですか？」

と、和泉はお祝いのつもりで囃した。高坂は「さて？」というように傾げてみせて、それから、「今度食事にも行こうか」と誘ってくる。

「高坂さんは彼女を連れていて、僕のほうは一人ですか。ご挨拶を試みたい気持ちはありますが、なんだか気まずいですね」

「和泉も彼女がいるってうわさを聞いたけど？」

和泉は驚いて否定した。

結局、断りきれずに三人で食事をする事になり、和泉はそのお披露目じみた席に行ってきた。祐天寺にあるイタリアンで、普段、

皆で押し込んでテーブルを占領してくる店とは違う。卒業しても付き合いを続けたいという高坂の気持ちが変わり、和泉はうれしかった。相手の女は小柄で丸顔の、いかにも活動的な性格だった。本屋が好きで新宿の紀伊国屋には週に三回くらい通っているのだという。高坂はいつ知ったのか北条民雄のことを振ってきた。

家をでるときから、何かを話すとしたら今日がいちばんいいだろうという思いがあった。今日話せなければ、誰に対しても相談する機会など二度とないのだと、覚悟を秘めてさえいた。そんなことを考えながらも、その場の雰囲気、話しだせるようなタイミングがなければ話さないことにしよう、と、運命に任せよう、適当なところがあった。誰かに対して本心を吐露することができ、そういう人生にたとえならなくても、それはそれで自分らしいようだった。

高坂に母方の遺伝について話すことは無かった。結婚するならば、という話題からお互いの家族について言葉を交わし、いくらか踏み込んだことも話した。そんな場で、初めに考えていたような運命に任せた態度をとらなかつたのは、目の前に座る高坂と女の、瑕のないまともさ、に目がくらんだからかもしれない。

いくらか酔っ払ったらしい先輩を女に任せて、和泉は二人を見送った。そのまま帰るつもりだったが、話せなかつたという事実にはひさがれていて、そのまま帰宅する事がためらわれた。

店の前で別れたのが九時半の事だった。いま帰宅しても江実はずっといないかもしれない。偶然、今日が芝田の家へ挨拶に行く日だった。このまま江実が芝田と家庭を持つならば、和泉はいよいよ一人になる。そのことも相俟って、身を任せられる寒々しさがつきまとい続けた。本当に寒気がしていた。夜になると、いつのまにかうつろった季節が肌を感じられるのかもしれない。

家に向かって三十分ほど電車に乗り、適当なところで降りた。アルバイトの帰りに行ったことのある、河口の見える橋へと歩いていった。頭痛がしてきたが、身を捨てる思いでベンチに座った。河口が

らの風は強く、前髪が後ろへと飛ばされ続けた。

しばらくそうしていると、頭におこった熱が、風に抗しているように感じられてきた。冷たくはないが止むこともない海からの風に抵抗して、この体が熱を発しているのではないか、そんな考えに取りつかれた。

(なんだ、熱気が残ってるじゃないか)

と、うそぶきたい気分だ。

延々と終わることのない戦いらしかった。血肉がいつまでも熱を発することに疑問はなかった。そのままじっとしていれば、海からの風が、先ずは止むはずだった。

精神に比べて、肉体は負けん気が強い、と和泉は思った。精神がやさぐれて捨てた気分になっていても、この体は生きようとする。それが不断のことであるのがおかしくさえあった。呪われていようと同じらしいのが、わが身ながらいじらしくさえあった。

(海からの風は強く吹いたり、凧いだり、ときには雹や曇さえ運んでくるが、俺の体は不断に熱を発して、変わらずに俺であろうとする。そこは、すごい)

そうしたことが書けないか、と考えた。大学の研究とは別に、そうした自らの肉体とのかかわりを、不断に表現していくことはできないか、和泉は考えをめぐらせた。

背後を絶えず車が過ぎていったが、和泉は一人だった。彼の下では、ずっと陸地の奥から流れてきた水が、河口へと下っていく。大気が曇り星は火星と木星ばかりだったが、やはり光っている。

頬が火照っていた。イスのベンチに接した尻が、冷たさでしびれている。パソコンの前に座ったなら、もう一度書き始められそうに思った。和泉はようやく立ち上がった。

十一時になろうとしていたが、江実はまだ帰宅していなかった。携帯電話に連絡することもできたが、ためらわれた。そのまま二階へと上がり、パソコンの電源をつける。半ば書き上げられていたものを、そのときの気分で一気に仕上げた。読み返してみても

も、悪くない。

『歌合』

奈良時代中期、伊勢の豪族の生まれである野見国恵（のみのくにえ）は七歳の頃より人質として平城京に住まわされ、貴人の文を送る小間使いをしている。主は五位小外記淡海紀麻呂（おうみのきまろ）である。

国恵の処遇は伊勢国造への押さえではあったが、習字に長けていたために紀麻呂には愛された。もちろん下級の役人であるから、紙などは使えず、往復する文には、小刀と木簡を使う。いわゆる刀筆の吏である。

おりしも平城京においては藤原仲麻呂の専横が甚だしくなっており、皇親である淡海一族は、同じく皇親勢力で最上位である右大臣橘諸兄を押し立てて、権力争いに半ば巻き込まれている。国恵の通送する書簡は日ごとに増えていき、その送り先も先日までは見向きもしなかった下位の豪族の邸宅にまで及んでいる。

多忙な日々であったが、国恵にも少年らしく気軽に話せる相手が出て、それは渡来系氏族の陽胡氏（やこ）で同じように小間使いとなっている真知である。真知の主、陽胡史真足（やこのふひとまたり）は、これは藤原氏の恩寵を受けている。つまり、二人は本人とかわりがないところで敵対しているのだった。

お互いの主を立ててけんかをすることはあった。しかし、立場は違えど、年少の友情は替えられるものではなく、国恵と真知は往來で逢うと路上で習字を競ったりしている。また、ごくまれなことであったが、他の貴族の邸宅で待たされているときに、お互いを目に留めることもある。そんなときは帰りを一緒にして叱りを受けない程度に市を一緒に歩くのだった。

ある日、その様な偶然が重なって、国恵と真知はおなじ貴族の邸宅にて待たされていた。人気のない三和土で侍っているのだが、仕

切られた奥の部屋からは歌合の声が聞こえてくる。威厳のある朗々とした声である。

さ牡鹿の 来立ち鳴く野の 秋萩は 露霜負いて 散りにしものを
夜を寒み 朝戸を開き 出で見れば 庭もはだらに み雪ふりたり

二人の少年は顔を見合わせた。和歌がいかなるものか知ってはいたが、その魅力に気付いた瞬間だった。鳥肌がたち目の奥で火花が散って、無垢な脳を刺激する。「これぞさるべきこと」と声を一つにして沈思黙考し、じつと立つ。先に詠んだのは真知だった。

さねかづら つちみしたぼう いへみより ささたちさわる をの
こめのこ

その作品の直接的で見たとおりであるのを国恵は笑う。さねかづらの実が集合果であるから子供らを連想したのだろうが、いかにも平易だった。それから、そうしているあいだにも考えていた自身の処女作を披露する。

あきふけし おほぢよぎりし うらびとの あしのまるやに かり
がねわたる

国恵は負けじと詠じてみせて、それからお互いの初めての歌を吟味する。その時は不出来なところの云い合いとなるが、その経験によって、ぼんやりとした紐帯が具体的な場を得ることになった。以来、二人は顔を合わせるごとに、自身の会心の作をぶつけあい批評し合うことになる。

下級役人の歌が貴族の目に留まるというのは考えられないことであり、そのことは二人ともよく知っている。和歌に取り組むのは国

恵と真知にとって、報われない毎日を過ごすための癒しに他ならない。だから、その傾向は身近なものから見て取った美とあわれと諧謔とにあつた。国恵が海石榴市の魚売りを笑ったなら、真知はその魚売りのあわれを返す。真知が冬枯れの木にあわれを見つけたなら、国恵はその枯れ木の美しさを重ねる。繰り返して物事の間接的な感覚を転じてみせることが、面白いようだった。あわれさをおかしさにおかしさをあわれさに、そんな詠歌に夢中になった。

和泉は物音に気づいてモニターから目を離れた。さっきからずっと聞こえているようでいて、たったいま始まったような物音だった。肌が泡立って、何か重要なことを見過ごしたように感じてくる。音は江実の部屋から聞こえていて、深夜にもかかわらず、まだ明かりがついている。妙に体が重い。

ドアを開けて廊下から江実の部屋を見ると、閉められたドアの間から明かりが漏れていた。前までくると、かすかにステレオの音が漏れている。和泉は江実がうたた寝しているのではないかと、そっとノックをした。ガサリ、と室内で衣擦れの音がして、姉が起きていることを知る。「開けるよ？」と声をかけてドアを開ける。

江実は床に置いたテーブルに突っ伏して泣いていた。身を引き攣らすようによじるので、そのたびにテーブルの細い足が床をこするのであった。姉が泣いているのを見るのは初めてだった。

強気で、助言をくれることはあっても愚痴を言うてくることのない相手である。普段はピンクのパジャマがフローリングの床に触れることを嫌がって裾を巻いたりしているが、それも気にせず、パンツを履いた両脚を床に崩している。

どうしたらいいのか、彼にはわからなかった。たったいままで小説の世界に没頭していたことも影響していた。現実感が薄く感じられる。和泉は必死で現実を手繰り寄せようとする。

「どうした？」

しばらくして声をかけた。擦れたような声がのどの奥から漏れた。江実は無反応である。

芝田とその両親との間に何かあったのに違いなかった。母親の最後のことを、芝田が家族に話してもしたのかもしれない。

(やはり、拒絶されたのか)

そう思うと、怒りよりも惨めさが先立ってわいた。江実には無邪気なところがあって、遺伝的な瑕疵というのを他者が受け入れてくれるものだと思っている。和泉は、そういう人間は確かにいるのだが、それを無邪気に信じることは無防備すぎると思っっている。

(善意のある人もそうでない人も、血が混ざることに対しては、潔癖ではられない)

姉の体は手折られた枝木のようなだった。しなやかなところもあるが細く力が感じられない。言葉の暴力というものが、人間の芯の部分をこうもたやすく傷つけることができるものかと、目の当たりにする。河口で感じたことの残渣がまだ残っていて、その感覚が、すんでのところで、積極性を支えていた。

「江実には僕がいる」

と、和泉が言うと、「うっ」と江実が嗚咽する。そのまま、またしばらく沈黙した。

「僕がいるから……」

と、和泉は繰り返した。それだけしかいえないことが歯がゆかった。芝田に言ってきたやると、啖呵をきるような抛りどころは何もないのだった。「大丈夫」とも、「心配するな」とも言えなかった。江実が耐えるしかないことが、和泉にはわかっていた。そして、姉弟にはぎりぎり、お互いが残されているだけだ。

姉の呼吸が深く穏やかになっていく。言葉に助けられるというよりも、和泉という運命共同体にたいして、自身しかいないということを手放さないのかもしれない。六年長く生きているということは、江実にとってそういう意味にちがいはなかった。

「どうか、別れてくれって」

と、小さな声で言った。

「向こうの親が？」

「うん」

「芝田は……」

「黙ってた。なんか言ってくれるかと思ったけど」

「あの野郎」

さすがに怒りがわいた。はあ、と姉はあきれたため息をつく。

「初めから言えっての」

首の据わっていない赤ん坊が身を起こそうとするときの不安定さ
で上体を縦にし、しわになったジャケットを明かりのもとにむき出
しにする。ボタンの真珠質が緑に光る。お気に入りの、INEDの
ブラウスだった。

「『江実ちゃんは悪くないのよ』とかつて……、いいわ、もう。あ
んた、なにしてるの？」

「なについて……」

「わたし、もう寝るから」

「その格好で？」

「いやね。着替えるから出ていきなさい」

はたして気を取り直したのか、それとも決まりが悪くて追い払お
うとしているのかわからない。無理に体を動かしていることだけ
は、手足のいかにも重たげな様子からわかる。

江実は会社のジャケットを脱いでしわを確認して眉を顰める。そ
れから手元でそれを伸ばし、適当なところでハンガーにかける。ピ
アスやヘアピンを外しながら、会社の経理課がいかに融通が利かな
いかを話し、結局それが経理課長のお局による悪影響であると説明
する。誰に話しているのかわからなかった。

それから、ちよつと驚いたような表情で「あら」と声をかけて、
再び「なんでここにいるの？」と和泉に言った。

「大丈夫かとおもって」

「大丈夫よ。ありがとう。あんたも、たまには夜更かししないで寝

なさい」

江実ブラウスのボタンに指をかけて、「ほら、潮時」と、和泉に部屋から出るよう促した。見当違いのことを話す姉が心配だったが、和泉がいる限り、身動き一つしないつもりでにらみつけてくる。からかったものなのか、動転してのものなのかわからない、ゆがんだ笑みを浮かべていた。

和泉は自室に戻り、再びパソコンのモニターの前に座ったが、すぐには画面の文字を追っていく気にならない。机上の写真では両親が屈託なく笑っている。姉の成人式のときに撮影したものだ。それからすぐに父親が亡くなり、母親も数年後になくなった。和泉にはそれが多感な時期であると同時に、学校で自我に思い悩むときでもあったため、気持ちのうえでは心配されるほど深刻なことではなかった。少なくとも、いまになってみればそう思われる。

江実にはどうであったと考えるが、姉がどのように振舞っていたものか、はつきりと思いつくことができない。それほど過去のことでもないが、親戚の家で堅苦しく過ごしていたということもあって、姉弟でお互いを気にする余裕があまりなかった――。

(いや、ちがう)

と、和泉は記憶を手繰り寄せようとする。打ちひしがれ、倒れこみながら、わが身を疑っていた。叔母につれられてどこかへ通院していた。それはたとえようもなくつらいものではなかったか。そうして、ようやくこの片隅のような場所で暮らし始め、芝田のような男が現れる。だけでも、芝田は覚悟のない男であった。

三年、だろうか。千日の付き合いの後ということにある。付き合いがどのようなものであったかを考えめぐらせて、急に嫌になりそれを打ち払い、ただ芝田への憎しみがつのった。

姉や自分と付き合い合うことが、他者に覚悟を要求する。そう思うとにわかには周囲の物事が無色になる。宣伝され賑やかされ、友人の間で話題となるようなことは、あまり足しにはならない。姉弟のあいだでは試練でしかないようだった。

(自分もいつか、姉と同じ経験をするだろうか)

そのとき自分は姉のようにたった一人の相手を追っ払って考えに沈むことができるか。その苦しみに耐えられるか。今日という晩を過ごせるか。先のことを考え始めると、いまの時間が薄氷の上に流れていることに気づかされる。

和泉は写真を手にとって、母親の目の奥を見透かそうとする。

「俺もあなたも空は飛べない」

と、しばらくしてつぶやいた。

四回生まで間近となっていた。和泉は大学院に進学する意思を固めていた。学部の修了とともにその学費によって、相続した遺産はなくなる。だから、奨学金を得るためにも、卒業論文には真剣に取り組まねばならない。書きかけの小説を仕上げたなら、創作からはいったん手を退こうと決めていた。そう決めると、好きにやれるのはいましかないという気持ちからか、より一層のめり込んでしまうようだった。それもいまの和泉にはどこかが合致した気持ちの良さがある。

再び古書を買集めた。和歌の資料なども面白く感じている。そこには苦しいところから、世の中を美しく捉える心があった。それがこの土地で生きた人間にふさわしいものらしかった。和泉にはそこまでの悟りはなかったが、この先にそうした感性が待っていることが予感された。望みさえすれば、やがてはそうした場所に行き着いていく、と感じられた。

江実はいまだに芝田と会っている。会ってどうするものなのかわからないが、見放すつもりでもないらしい。そもそも、この間の事に関して芝田がどのような考えでいるのか和泉にはわからない。キツパリした性格の江実が見放さないということは、思っているよりは心のある人間なのかも知れなかった。

たまに、芝田の、「釣りに行こう」というセリフが意識に甦った。そんな気持ちが芝田に残っているのかわからないが、もう一度

誘われたなら、行ってもいいという気になっている。そのときは芝田を殴るかもしれない。そのあとに一緒に釣り糸をたらしながら、なにかしら話ができるだろう、と、おおらかな気持ちにさえなった。姉をとられるとなれば話は別だが、それはおこるとしても、ずっと先のことに違いない。休日に装って出かける江実の表情に曇ったところはなかった。姉を見送ったあとに、和泉は再びパソコンの前に行き、創作の続きを書く。

過日、和泉はしまわれていた遺灰をひそかに取り出した。碁石状の骨壺に納められたそれをポケットにねじ込んで、和泉はいつもの河口へ原付バイクを走らせた。

両親が去ったあと、時間がたつほどに暗鬱なところが見えてくる。それは江実と自分にもともと備わっていたのかと思うが、近頃の生き様のせいであるのか、どちらかはわからない。あるいは周囲を見渡す目が変わったんじゃないかと思う。では、江実は何が変わったの、と誰かに問いかけたい。

寂しい、同じ血を受けた人に置いて行かれたことがつらいのだった。見放されたこの体を、持て余してしまうのだった。それをどうしたらいいのかわからない。それはいつまでも問い続けねばならないことらしかった。

杉並の火葬場で焼いた両親の灰を、和泉は橋の上から撒くつもりでいた。その灰は川底の汚泥に沈むだろう。それからどれぐらいに時間が必要かはわからないが、汚泥もやがて、海へと流れていくはずだった。海。海もまたヘドロがたまっているだろう。それから和泉の期待でしかない。ヘドロがかすかな潮流にさらわれて、太平洋に散らばっていく。そうすると、母の苦しみも、どこかで日の射した水面に出会い、慰められ続けるのではないか。そうやって、苦しみのなかつたところに還るのではないか。できればその場所から、江実と自分とを見つめてほしいのだった。「強く生きろ」と言ってほしいのだった。

和泉は風のない夜に、それを実行した。だから、いま江実のタン

スにしまわれているそれの中には、二人の遺灰は半分だけである。

(褒められるんじゃないか)

と、和泉は思う。しかし、このさきずっと、誰にも話さないつもりだった。『歌合』に取り組み始めてから、いつの間にか心の中で両親に話しかけるようになっていた。それは自分らしさの一端であると、思うようにしている。

可可仵と背乎、二人の娘に出会ったとき、国恵は数えて十五になっていた。宮廷では諸兄が失脚し、皇親派は後退していたが、橘奈良麻呂を中心とする派閥が仲麻呂と対立している。京中にはものものしい不穏な空気が流れている。

可可仵と背乎は姉妹で、傍流ではあるが石川氏の出である。美貌を持って生まれ、本来ならば高官の妻にもなれたはずだが、幼少時に豌豆瘡に罹り、瘢痕のため容貌が損なわれた。いまは僧門に入るのを待つばかりの身である。親は五位右衛門府の督で、二人の娘を訪れることは絶えて久しい。屋敷の差配は四十を過ぎた女房が務めていた。

先に知り合ったのは真知のほうで、和歌のためし詠みをしているところに声をかけられ、屏風越しに自作を披露した。石川郎女と呼ばれる屋敷の女主人、可可仵であると知ったのは去り際のことであり、また妹の背媛が同席していることもそのときに知った。真知が言うには、競い相手である国恵も呼んで、四人で歌合をする約束をしたのだった。

それまで人前で歌を披露することなどなかったから、二人の媛、国恵は二人が僧門に入る身であることを知っている、との四人で歌合することなどは、思いもよらないことだった。しかし、数年にわたって研鑽した表現の方法を、宮廷の作法もいくらか知っているであろう媛を前にして駆使するのは、避けがたい魅力なのだった。

約束の日、国恵は特別な休みをもらい、故郷より送られた麻の貫

頭衣に革帯を締めた。普段とは違う盛装に照れくささを感じながら石川邸までを歩くと、乞食、流民、私度僧のたぐいすべて自分を眺めているようで手足が硬くなる。その石川邸にはすでに真知が来ていて、彼もまた普段とは違う盛装をしている。丈が合わないようなので訊いてみると、それは他の雑徭から借り受けたものだと答える。

歌合の場は縁台をはさんだ室内から、玉砂利を敷いた庭までである。室内と庭は無地の屏風に仕切られて、屏風の裏には媛二人が、庭には国恵と真知が待る。

初めて聞く石川郎女の声は震えていた。人前で歌を披露する緊張は同じであるらしく、背媛のほうは衣擦れの音でその存在がわかるだけで、姉と話す声すらも聞こえてこない。歌合の形式が整う以前のことであり、それぞれに役もない。向かい合って詠み合い、簡単な批評をするのみである。それでも媛二人の緊張は雑徭二人の緊張と同じで、自作を人前で披露するということからくるものようである。

よそいつき　よそほしうてな　いままさに　ながめししりふと　すがしめあがむ

郎女に促されて、まずは国恵が詠んだ。声をかけられた日から様々な言葉を練っていたのだが、作法のうえでは、始めに詠むのは相手への賛辞でなければならない。

しりふとの　みそむびやくえ　はつしもの　たまのうてな　いともゆゑぶ

国恵の歌を受けて真知が続いた。屏風の陰から「ほほ」と笑う声が聞こえた。白衣が趣を添えると詠んだことへの反応であろうか。それから四人がめいめい、思いついたことをわれ先に詠ってみせ

た。姉の可憐の歌は勘定にかけるところがあるが、言葉の巧みさで景色を歌いあげる。背乎は、まだ若いこともあつてたいい単純で稚拙であるが、ときおり、子供らしい新鮮な感覚を読むことがある。

いままで二人きりで競つてきた国恵と真知にはどちらの歌も刺激的だった。世界が新たに開けたような、視野の広がりを感じた。

それ以来、四人で歌合をすることが何度かあつた。形式はいつも同じで、石川郎女らは姿をみせることはない。それでも国恵には四人の心が次第に寄り添うように、いたわりが滲むのを感じた。歌を交わせば交わすほどに、自分たちの生い立ちが、そこに籠められていくのだった。

四人の歌合は一年ほど続けられた。その年、以前より権力闘争の中心にいた橘奈良麻呂が讒言により失脚、拷問のはてに死んだ。一味への過酷な追求によって反乱の計画が露見し、恵美押勝（藤原仲麻呂）に敵意を抱いていたあらゆる氏族、豪族にまで取調べが及んだ。いわゆる橘奈良麻呂の変である。

国恵の主である淡海紀麻呂は、連座して取調べを受けた。捕縛手として館に現れたものの中に、陽胡史真足の息子たちも含まれていた。彼らの手勢のうちに、真知もいる。国恵は平伏して主が引かれていくのを見守った。縄を握るのは真知であつた。下賤のものとして選ばれたに違いなかつた。三和土に散らばる微塵に額を押し付けて、国恵は真知の足音を聞いた。主が引きずられるようにして後に続くのを聞いた。そうして、淡海紀麻呂は二度と帰らなかつた。

主家が滅んでも、故郷から戻れという使いは現れなかつた。行く先を見出せず淡海の屋敷に仮居している間にも、近衛府、衛門府の衛士が立ち代り現れて、略奪を重ねた。瞬く間に屋敷は荒廃した。国恵は政治というものを恨んだ。また、それに諾々と従つた真知にも恨みを抱いた。清澄な歌を交わしたのは、真知の戯れであつたと思ひ、自らの歌も穢れたような気がしてならない。

食べるものもなくなり、伊勢に帰ることにした国恵は、最後に、

可可仟と背乎に挨拶をしようと思ひ立つ。衛士に見つかりと直ちに打ち据えられるので、夕闇まぎれて盗人のようにして石川邸に忍び込む。石川の家もまた藤原方であり、忍び込んだことが露見したなら、切り捨てられてもおかしくはない。それでも、国恵には、歌の一首でも残していくことが必要に思えた。それすらもできずに都を去ることになれば、自分の十年がまるで幻であったかのようにであり、苦しいのだった。

見知った女房の手引きで事情を知り、背乎がもはや斎宮へ出立したことを知る。可可仟は熱を出し、一人残されて寝ているという。その寝所の前に国恵はかしまった。都は戒厳令がしかれ、静まり返っている。虫の声ばかりが響き、その上を天の川が瞬いていた。寝所の中はゴマが灯火としてたかれ、音もなく踊っているかのよう

に揺らいでいる。しばらくして衣擦れの音がした。気配を感じて可可仟が起きたものらしかった。灯火を背にして、女の影が浮き上がった。そつと、衝立が避けられた。

可可仟は扇で顔を隠し、その後ろから国恵を見ているようだった。国恵は畏れて平伏している。お互いに何も口にせず、四半刻ばかりじつとしていた。

たまかぎる　ゆふへいうげし　しりふとも　ゆめちにゆする　ゆめのゆめ

どちらともなく、一首うたわれた。